

くさる 腐る 自然さ

いうことである。あの感動を再びというのはない方がいい。それが最後という覚悟がその人を大切にする心を育てるのである。

新鮮なものはやがて腐り、滅びていく。そのすべ

てのプロセスを抜かすことなく見つめることができ、臨床の心なのではないを慈しむということであり、臨床の心なのではないかと思う。

(お茶の水女子大学)

鍋島 恵美

久しぶりに巡ってきた三歳児との生活。家庭の育児力低下が心配され、おとなも子どもも群れて遊ぶことが少なくなつてきました。住まいの環境も美し

く整い、動植物を家庭内で育てることに抵抗のあらる人も増えてます。何もかもさらっときれいになつてきたように思います。

育てる くさる

二〇〇〇年四月から出会った三歳児の生活は、「家庭との連携」にこだわりました。お母さんたちが、家庭で大事にしてきたことを引き継いで幼稚園でもしていこうと考えました。「お話をよく聞いてあげました」「おしつこがまだ間に合いません」「絵本が好きで読んできました」「公園で一緒に遊んでいます」とか「うがい、手洗いは必ずしてきました」「粘土遊びの時はスマックを着せてからにします」と、お母さんたちからの話はいろいろです。そして、「だから先生もそのようにしてください」と要望がついています。「いいですよ。一緒にやつていただきましょう」と、保育者も受けとめていきました。

六月、入梅を迎える前に、夏野菜の苗（スイカ・オクラ・トマト・キュウリ・ナス・トウモロコシ・ミニトマト・ピーマン）を用意して、二組の親子で一つの苗を選び育てることにしました。こどもより

も、お母さんたちが育てることに一喜一憂していました。「先生、花が咲きました。ピーマンの花つて可愛いですね」「オクラがこんな風にできるなんて知らなかつた」「スイカは、小さいときからシマシマ（模様）なんですね。食べるのが楽しみ。Yさんからできたら味見させてねつて今から予約付けてます」等々。家庭でも気軽にできるように袋栽培にしました。その袋の前が、野菜育て、子育て談義に花の咲く場になつていきました。

蔓性の野菜には、頃合いを見て支柱を立ててやることが必要です。一組のおとな同士の協力作業です。「いつする?」「〇日にしよ!」「わかった」とか、「何時にしてしまうか?」「うちちはいつでも良いですよ」とか、それぞれの会話の口調から関係を察することができる好ましい光景です。

そんななか、SさんとOさんのくさつた顔。「どうしたの?」と尋ねると、「せっかく赤くなるのを楽しみにしていたのに、ほら」と、Sさんが指さし

特集 〈くさる〉

ます。見ると、トマトの赤く熟れはじめている底が腐りかけています。「まあ……」（しばらく残念な沈黙）。Sさんは「まあ 仕方ないですね。次を楽しみに」と、気をとり直してYさんと帰つて行かれました。そのお母さんたちの表情を見て、いたこどもパーツと駆けていきました。ほつとしたのでしょう。

くさる 食べる

スイカも少しずつ大きくなり、いつ熟れるのか楽しみになつてきました。収穫の頃合いを見定めながら今か今かと思っていた日、パカッとはじけたスイカになつてしましました。「嘘、なんで！」と、朝一番にきた保育者が見つけてガツクリ、次にこどもを送つてきたお母さんがガツクリ、育てていたHさんもそれを見てガツクリ、おとながみんなガツクリくさつてしましました。その表情を見ていたS子もY君も困り顔。そこへ「その犯人はハトやな」と、確信を持つて告げるHさん。「ハトが食べたんか？

►一組の親子で一つの苗を育てる



おいしかったやろなあ」。その二どもの声に我に返つたおとなたち。「つつかれたところはやめて、後は食べられるでしょう」。「そうですね」と、Yさんがもらつて帰ることになりました。翌日の朝「先生、おいしかったですよ。へたは浅漬けにして食べました。こどももおいしいおいしいつて食べましたよ。ごちそうさまでした」。よかつた！

腐つた お化け

九月。大きいお化けカボチャの収穫。保育室の真ん中に置いておくと、ドカドカこどもたちが群れてきて、「これ何?」「おおきい!」と、騒ぎ出します。「これ知ってる? お化けカボチャって言うのよ! お化けのか・ぼ・ちゃ」と、ちょっと凄んで話すと、「キャー」とののり。そののりにまたのつかつて「夜になるとね」と続けると、ますますこどもたちの表情が動き出し、「ボカーン ボカーンつてね」と続けるごとに息をのんで聞き、「動き出す

んだよ」と話すと、またまたSちゃんが、「キャー」。「そして動き出すの」というと、またまた「キャー」。Sちゃんが「夜になると」と、その続きをもう一度聞きたいらしく、「動き出すの」「キャー」、「夜になると」「キャー」という遊びになつておもしろがつていると、M男が本棚から、「これと一緒や!」と、一冊の絵本（チャイルドブック）を持ってきました。

それは、七月に読んだ月刊絵本で、『おばけなんてなんてないさ（歌絵本）』だったのです。その中の見開きページの「おばけのくにつて こんなくに！」にお化けカボチャがいるのです。そのページを開けて、「な! これと一緒や」と。みんなは、「そう そう」と、のぞき込んでいます。すると、M君、何を思つたのかお化けカボチャめがけてボカンと一発! わたしは、「あつ! お化けカボチャ叩くなんて、M君の手消えてなくなるよ」と、脅してみました。すると「そんなことないわ」といって

特集 くさる

がらもM君、その手をズボンでこすり何度も確かめているのです。ことばと心が違う心理状態が、なんともおもしろく、おとなには愉快です。また保育者の遊び心がこどもから誘発されて「知ってる？ こんなお話をあるよ」と、『きれいなはこ』（せなないこ）を読んでみました。

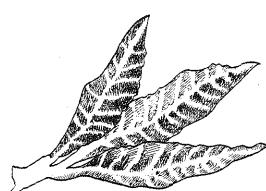
翌日、M君の「一緒や」と、出てきた場面のなかのカボチャを真似てお化けカボチャに口と目を描いて置きました。わあーと驚くこどもたち。またまたM君。「こんなもん怖くないわ」と、持ち上げてズドン落としてしまいました。「あー恐ろしい 恐ろしい」と言いながら、落ちたカボチャを抱き上げ机の上に置きました。

数日後 こどもたちがお化けカボチャから遠のいた頃です。ふと、掃除しながら気づくと、M君が落としたときにできたカボチャの傷からなにやら恐ろしい汁がでています。「ウヒヤー」と思つて、よく見てみると腐つてきているのです。「そうだ！ 遊

ぶだけ遊んでほって置いたから、お化けカボチャがふてくされて腐ったんだ！」なんて考えているうちにおかしくなつてきて、「ちょっときてごらん。お化けが……」と、こどもたちを手招きすると、どれど近づいて来るやいなや、S子「気持ちわるい」と、後込みはじめました。「大丈夫よ、きてごらん」と、もつと間近に呼ぶと、今度は「くさー」「臭い」と、ますますお化けカボチャがくさる思いになつていくようなくらい、こどもたちの“臭いコール”がかかるつてしましました。ごめんなさいお化けカボチャさん。土にそのまま埋めることにしました。

それからそこは、お化けの住むところになりました。M君が何度もとなくその場所で見入っているのを見かけました。

くさる、腐るお話をでした。



野菜が腐り土に帰る。人の気持ちがくさり立ち直

でしようか。

(京都教育大学附属幼稚園)

る。これは、当たり前のごく自然な整理なのでしょ
うが、それがしにくい時代になつてはいるのではない

腐るのも大切

一目に見えない微生物の働き――

村田 容常

目に見えない微生物

空气中や土の中には無数の微生物がいる。土一グラム中には十億個もの微生物がいると言われている。

私たちの世界には目に見えない微生物が一緒に生きている。微生物とは肉眼では見えないが顕微鏡レベルで見える生物のことである。私たちを取りまく

細菌) だし、食中毒を引き起こすO157や黄色ブ